

# 山形大学附属博物館報20

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1994. 3. 30

## 目次

- 小さな野外遺跡博物館 ..... (1)  
ロンドン、ナショナル・ギャラリーの不思議 ..... (2)  
中国の博物館と中国の近代 ..... (3)  
資料紹介 ..... (5)  
平成5年度 学芸員実務実習・公開講座・特別展を終えて ..... (6)

## 小さな野外遺跡博物館

館長 仲野 浩

最近、「エゾヶ島」と呼ぶ人が少しずつ増えてきた北海道——その南の渡島半島の西海岸の中ほどに、上ノ国町という松前町と江差町に挟まれた人口6000余名の町がある。今でこそ過疎の町であるが、その昔、15～16世紀には、北海道中でもっとも注目され、栄えたところである。17世紀中葉、松前景広が撰した松前藩最古の記録『新羅之記録』には、道南渡島半島に、12の館があったと記されているが、実際には、この時期の渡島半島には、その倍ほどの館があったものと思われる。その中で、函館・上磯地方を治めていた下之国氏と、渡島半島西部に拠った上之国氏が有力で、安東氏から守護職に任命されて、それぞれ茂別館（上磯町）と花沢館（上ノ国町）を中心の館としていた。花沢館は、上ノ国町を東から西に流れて、日本海に注ぐ天ノ川の左岸に位置するが、上ノ国町には、この他にも花沢館のすぐ西に勝山館、花沢館の対岸には、洲崎館があり、いずれも上之国氏・武田氏・蠣崎氏にまつわる記録や伝承が残っている。上ノ国町には、この他にも館跡が残っているが、これらの本格的な研究・調査は、まだ始まったばかりといってよかろう。花沢館・勝山館・洲崎館は、いずれも国の史跡に指定されており、このうち勝山館跡は、15年前から発掘調査と遺跡整備事業が行われ、数々の、それも予期していなかった

新事実が判明しつつあり、北海道史だけでなく、日本中世史研究で最も注目されている遺跡の一つである。

上ノ国町は、こうした町の生い立ちを町民みんなで考え、広く国民にも理解してもらう縁にしようと、博物館施設の建設を計画している。「町おこし」という別の目的も兼ねている。「町おこし」事業は、当初3つの地区、即ち、「海のふるさとゾーン」「緑のふるさとゾーン」、そして「丘の歴史ゾーン」にゾーニングされ、事業を計画し、一部は完成間近というところまでできているが、途中で一部計画を変更し、事業を行っている。「丘の歴史ゾーン」は、史跡に指定されている勝山館跡が中心で、指定地外の南の丘に博物館施設を建設し、眼下の発掘・整備が進んでいる館跡を見下しながら館内を回ってもらおうという発想である。発掘・史料検討・整備・博物館建設事業には、日本史では朝尾直弘京大教授・網野善彦神奈川大教



授・石井通国立歴史民俗学博物館長・榎森達東北学院大教授、それに私、考古学では坪井清足前奈良国立文化財研究所長、建築史では給井直文化学院助教授、都市工学の分野では足達富士夫北大教授、渡辺定夫東大名誉教授、造園・林学では井手久登東大教授の協力を得ている。

遺跡博物館site museumの考えが、わが国で議論され始めたのは、昭和30年代末近く、特別史跡平城宮跡をどう整備するか、様々な分野で問題になった時からである。遺跡博物館は、遺跡の整備と遺跡に関連する事柄を室内で学ぶという二つの事を合体させ、歴史への思いをかりたて、遺跡の語ることを通して、現在の生活の充実をはかり、未来をクリエイトする力の根源を創ることを助けるものでなければならない。しかし現実には、若干の所で遺跡博物館と称するものがつくられているが、二つの要素、つまり遺跡の整備と室内展示がバラバラで成功した好例となると返答に窮する。

上ノ国で建設構想が進められている『北海道中世歴史資料館』（仮設、いづれ素敵な名称がつく筈）は、立地条件が素晴らしい。丘の上から北を眺めると、上ノ国の町を右下に、正面には海の向うに江差の町並と陸島が広がる。春夏秋冬、その月々の美しい風景を楽しませてくれる。眼の保養とでもいうのであろうか。素敵なカップに美味しいコーヒーを注いで、濃濃な味のケーキとともに口に運びながら、或いはブレンダーカストレートのウィスキーをせいぜい2杯ほどを時間をかけて口の中で弄びながら、ティーラウンジのワイドガラス越しに遺跡を見下し、時には椅子を回転させて館内の展示を、或いはスクリーンに写し出されている無音の映像に眼をやる……そんな館になればと夢を眼ませている。第一期工事が完成し（約12億円）、博物館施設がオープンする迄、まだ5

年程の時間を必要とする。この1月に展示のコンペが行われ、目下展示の最終案の作成にとり組んでいるところである。展示業者も、こうした構想を少しは抱いていると判断した業者が応募した。第一期工事が完成する頃には、遺跡の修景整備や建物遺構から得られたデータの分析・研究も終って実物大建物展示物の何種かが遺構の上に建ち始めているであろう。墟の復原や周囲の圃も復元的に処理される筈であるし、山の植生も研究・分析が進めば、15～16世紀に戻したらどうかということも議論されている。海風をもろに受ける厳冬に、遺跡整備の成果品が耐えられるにはどのようなものとするか等々、問題は山積みしている。第一期工事に引き続いて研究・情報システム等の機能を主とした第二期工事（研究棟、最低8億円）が待ち受けている。函館からJR北海道江差線か函館バス（江差で乗換え）の何れかで2時間余という交通上のハンディはどうすることもできないが、北の地上ノ国に、みんなで考えた小さいながらも楽しい『歴史の<sup>あな</sup>館』が誕生しようとしている。遺跡博物館・野外博物館の名に恥じないものとして生まれてほしい……。

（地図は上ノ国町教育委員会発行の報告書より複写或いは上ノ国町教育委員会作成のものを使用）

（教養部 教授）

## ロンドン、ナショナル・ギャラリーの不思議

元木 幸一

わたしは出無精である。美術家の風上にもおけめ性格といえる。もともとが出無精な上に、最近は何歳かのせい、ますます旅行が億劫になってきている。まして外国旅行は面倒臭い。とはいえ西洋美術家であるから時々作品を見に行かざるをえない。調査旅行というやつである。が、調査旅行の行き先はたいがい美術館、教会、宮殿などであるから、いわゆる観光旅行とほとんど変わらない。だが、それはわたしのせいではない。美術家としては嬉しい（悔しい？）ことに、かつ不可解なことに、日本人の多くがヨーロッパを旅行すると突然美術愛好者に変身してしまうからだ。そんなわけで出無精な自分に鞭を打って出かけた調査／観光旅行の随に訪れた多くの美術館の中で、



もっとも好きな美術館のひとつ、ロンドンのナショナル・ギャラリーについて気ままに綴ることにしたい。

美術史家の端くれに名前を連ねるようになって初めて訪れたヨーロッパの美術館がロンドンのナショナル・ギャラリーだった。15世紀フランドル絵画の巨匠ヤン・ファン・エイクの代表作『アルノルフィーニ夫妻像』を見るのが第一の目的だったが、当の作品以上にその見事なまでに教育的なコレクションの質と量にびっくりした。というのはヨーロッパの美術館は、近年我国で雨後の筍のように続々とできていく美術館とは違って、たいてい王侯貴族などの個人コレクションを基礎にして創設されたことから、個人の趣味や政治経済的関係を色濃く反映した偏りが存在するのが普通だからだ。例えばウィーン美術史美術館の有名なブリュゲル・コレクションはハプスブルク家のエルンスト大公の全く個人的な好みから発したものであるし、マドリードのプラド美術館には同じフランドルの奇想の画家ヒエロニムス・ボッスが多数集められている（16世紀にはフランドルはスペインの統治下にあった）。ところがナショナル・ギャラリーにはその偏りが無い。中世末期から18世紀までの重要な画家がどの地域、時代も満遍なく、しかもその画家の代表的な、あるいは典型的な作品が収集、展示されている。この美術館を順序通りに見て行けばヨーロッパ美術史はマスターできるといったふうなのである。不思議な美術館である。美術館は社会教育施設だというのが近代社会での一般的認識であるが——だから学芸員の資格取得のためには「社会教育学」の単位が課せられている——、これほどそれらしい美術館は珍しい。

ところがそのヨーロッパ美術史に対する公平な態度は、実はイギリス美術の貧しさに起因するといったら、イギリス人は怒るだろうか。自慢じゃないが、わたしは19世紀以前のイギリス人美術家の名前を10人挙げられない。おまえが無知なだけとは言わないで欲しい。イタリア、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギーならもちろんたやすいし、スペインですら多分大丈夫である。それは日本以外の美術史家でも似たような状況なのではないだろうか。そして自国の美術の貧困さをイギリス人自身も承知しているのではないかとさえ思われるのである。だからこそ、島国ゆえにナポレ

オンの戦禍を免れることのできたイギリス人は、大陸の没落貴族から優れた美術作品を掻き集めるため競って旅へ出たのである。イタリア人はイタリア美術以外にはきわめて冷淡である。フランス人ですらそのような傾向がある。だいぶ前にルーヴル美術館がドイツ・ロマン派（唯一？）の大画家C. D. フリードリヒの作品を購入しようとした際には、反対の大議論が盛り上がったという。しかしナショナル・ギャラリーを見る限り、そこにはナショナリズムの影も形も見られない。イギリス人は大陸の美術に対して実に公平で、鷹揚なのである。

しかし、そのことは、イギリス人の美術創造とはまた別の才能の現れでもあるように思われる。美術鑑賞の才能である。19世紀の優れた批評家ウォルター・ペーターを初めとして、近年亡くなったケネス・クラークまで、イギリス人には美術批評の達人が輩出している。これらの人々は決して美術史家として特に重要なわけではない。しかしこれらの人々にかかる、美術作品の「本質」が言葉で過不足無く表現されているように錯覚させられるのだ。映画の淀長さんのようなものだ。世の中に話し好きの人と聞き上手の人がいるように、イギリス人は芸術に関していえば創造より、鑑賞に向いている。いってみれば、話し上手ではないが聞き上手らしいのだ。この「芸術の聞き上手」的性格が遺憾なく現れているのが、ナショナル・ギャラリーなのだ。だからこの美術館は偏りなく魅力的な作品に満ちている。玉石混濁ではなく、玉のみなのである。

最後に、その中でも特に気に入っているものを一つだけ挙げるとすれば、わたしは躊躇なく15世紀イタリアの画家ピエロ・デッラ・フランチェスカといたい。ピエロに関する限り、本場イタリアで見るよりも遥かにナショナル・ギャラリーで見る方が素晴らしいのだ。（教養部 助教授）

## 中国の博物館と中国の近代

中里見 敬

博物館や美術館は、そもそも近代国家の成立と無縁ではない。そして、近代では西洋中心主義が普遍だと思われるようになった時代である。秦始皇帝の兵馬俑のような大規模な出土遺跡をはじめ

とする4000年の文明を誇る中国の博物館にも、近代国家事業としての意味が深く刻み込まれている。



さて、中国一有名な博物館といえば、**故宮博物館**であろう。天安門広場から毛沢東の肖像画をくぐって中に入ると、そこは明清二代の皇帝のかつての宮殿、すなわち故宮である(写真1)。とはいえ、清朝の皇帝は河北省承德の**避暑山荘**で夏を過ごすのが恒例で、北京の宮殿で一年中暮らしていたわけではない。西太后は、北京では**頤和園**や**円明園**で過ごし、宮殿は祭祀のときに来る程度だったらしい。そんな故宮は、現在博物館として公開されており、宮殿建築が保存されているだけでなく、書画骨董や外国使節から贈られた品物などが陳列されている。しかし、故宮所蔵の最も価値ある品々は、日本の侵略を逃れて各地を転々としたあげく、国民党の軍艦で台湾へ運び去られ、現在台北にあるもう一つの故宮に収められている。

中国の博物館は略奪の歴史に飾られている。最も有名な例は、北京原人だろう。北京市郊外の周口店で発見された旧石器時代の人骨は、すでに半世紀以上も行方不明のままである。

**敦煌莫高窟**で今世紀初頭に発見された1000年前の写本は、大部分がスタイン、ペリオといった西洋の学者によって持ち去られ、現在大英博物館やフランス国立博物館の所蔵に帰している。日本にも大谷探検隊によってもたらされ、東京国立博物館、龍谷大学、大谷大学などに分散し所蔵されている。

中国側はこうした行為を列強による略奪として激しく非難している。一方、西洋や日本の学者の中には、文物の管理の進んだ外国の博物館に保存することをよしとする意見もある。しかし、例え

ばシルクロードの**ベゼクリク千仏洞**で、鞏固がもの見事に削ぎ取られている跡を見たときに、私はやはり略奪という言葉を思い浮かべざるをえなかった。

略奪と破壊は中国人自身の手によっても行われた。中国で見かける仏像のほとんどすべてが、目や鼻のない無惨な姿になっているのは、25年あまり前の文化大革命の傷跡である。

中国の博物館ならどこにでも展示されているものに、「マルクス主義教条」がある。改革開放の中国ではめったにお目にかかることなくなったかつての共産主義の理想とその教条が、数十年前の化石状態で、博物館には堂々と陳列されている。例えば天安門広場の東側にある**中国歴史博物館**は、原始共産制から始まり、偉大な毛主席による革命で終わっている。様々な歴史的遺物が、貴族の人民に対する搾取の証として展示されている。同時に垣間見えるのは、漢民族中心主義である。ウルムチの**新疆ウイグル自治区博物館**では、「漢の武帝は当時圧迫されていた中央アジアの人民を解放した」という記述に出会った。漢民族による周辺民族の征服を、このように説明してしまうところに、中国の抱える欺瞞を見ないわけにはいかない。

そして、中国の近代史と切り離すことができないものとして、また我々一方の当事者として、北京市蘆溝橋の**中国人民抗日戦争記念館**や**南京大屠殺記念館**を忘れることはできない。

中国の博物館をめぐって感じるのは、決して悠久の歴史への誘いだけではない。私が中国の博物館で見たのは、近代国家の成立に困難を伴った中国の産みの苦しみであり、また現代中国の姿そのものであったようだ。



[写真2は、清代の石碑に紅軍が残した抗日戦参加を訴えるスローガン。近代史、中国共産党史の史料として展示されていた。四川省広元市にて]

(教養部 講師)

## 資料紹介



上掲の写真は、「三島県令道路完成記念画帖 其之三」（山形県分）の中の一枚です。明治初期の山形市街を描いたものです。通りの突き当りにある建物が当時の県庁で、近くには南山学校・製紙工場・博物館・郡役所・警察署がありました。現在の七日町大通りから旧県庁方面を見る構図になっています。これは縦17.6cm・横23.6cmの絹地に石版印刷をして、その上に一枚一枚手で淡彩をほどこしたものです。

この画帖は全3巻で、柳木県（序と20図）・福島県（53図）・山形県（55図と跋）とからなり、明治18年に玄々堂から出版されました。これには土木工事によって新たに造られた各県の道路や橋梁などが描かれています。これを制作した人物は高橋由一といいます。

高橋由一は、明治という日本が近代化を進めていた時代にあつて近代洋画のリアリズムを追求し、それを樹立した最初の画家として有名です。由一は文政11年（1828）に佐野藩士高橋源十郎の子として江戸に生まれました。幼少より絵の才能があり、始めは狩野派に学びましたが、西洋石版画の迫真性にうたれ、幕府の蕃書調所画学局に入って川上冬崖のもとで西洋画法を学びました。さらにイギリス人のワグマンやショイヤー夫人にも指導を受けました。また画塾天絵楼を開き、後進の育成にあたるほか、美術館設立運動を展開するなど、油彩画啓蒙運動に力を尽くしました。

由一は明治14・17・20年と三回にわたって山形県に訪れました。この画帖は明治17年の来県の際に描かれたスケッチをもとに制作されました。

さてこの画帖の制作を高橋由一に依頼した人物

は、三島通輔あきつゆといひます。三島は天保6年（1835）に薩摩藩士三島通純の子として薩摩（現在の鹿児島県）に生まれました。明治維新の際は薩摩藩兵として戦いに参加し、維新後は新政府に出仕し東京府参事・教部大丞を経て、酒田県令となりました。その後明治9年に統一山形県が成立するとその初代県令（今の県知事に相当）となり明治15年までその職にあり、次いで福島県・栃木県の県令を務めました。明治18年には警視總監の職に就き、臨時建設局副総裁も兼任しました。

三島は「土木県令」と称されたほど、数多くの道路開発や建築工事をしました。現在の山形県（特に山形市）の近代化の礎を築いた人物です。遊学館の東隣りにある三島神社はこの三島を記念して建てられたものです。三島が山形県令に在任中の6年間に行った土木工事は、道路の部23箇所・橋梁の部65箇所・建築物では県庁・師範学校・済生館病院・製糸工場等、数えきれない程でした。三島が土木工事を推進した背景には、明治政府の富国強兵・殖産興業策がありました。これらは日本の近代化を進めるにあたっての重要な課題でした。その一環として交通網の整備があつたのです。今でこそ山形新幹線や山形自動車道・東北自動車道等によって日帰りができるほど山形と東京は近くなりましたが、明治の初め頃までは山深い遠隔の地でした。三島は橋を架け、道路を開発し交通網を整備して東京と地方をつなげることによって、産業を育成し発展させ、山形県と東北地方の振興を目指しました。そしてそれがひいては日本のためになると強く確信していたのです。ですから三島は強硬な態度でこれらの事業を押し進め、完成させていきました。

したがって三島はまた「県令」とも称されました。三島の強引なまでの計画推進は、時には民意の不满を引き起こしました。工事にともなう費用の負担や人夫の徴発・用地の収用等です。しかし、三島は天皇のため、国のため、人民のためと信じてあくまでも態度を変えることはありませんでした。まさに「鬼」と呼ばれる所以です。

しかし、三島は「鬼」だけではありませんでした。三島が福島県令専任になって山形県を離れる際に、東豊馬郡の戸長ら数十人が三島の数々の業績を称え、「慈父」と慕い、留任を政府へ嘆願しました。

これは三島が「鬼」と「仏」の両面を持っていたというよりは、三島の一貫した態度——全ては天皇のため、国家のために行うことであり、それが国民

のためと信じ、そのための道路開発や病院・授産所の建設だったので——が「鬼」と人々に受けとられたか、「慈父」と受けとられたかの違いではないでしょうか。

なお、当館にはこの画帖とほぼ同時代に出版された「済生館納絵」・「山形縣新築之図」・「眼鏡橋の真景」という、近代山形市の景観を描いた全3葉の「開化錦絵」や、明治14年に撮影した菊地新学の「山形市街図」の写真（複製）があります。これらと画帖を比較する時、近代山形県の成立とそれを強力に推進した三島通庸の姿が浮かび上がってきます。

**平成5年度  
学芸員実務実習・公開講座・  
特別展を終えて**

今年度の実習実施者数は107名と、3回に分けて実施した平成4年度と同じ人数であったが、今年度は種々の制約により2回のみの実施となった。そのため1回に50名を越す実習生の指導と、館外での実習の際の安全管理は困難を極めることになり、また、1回目・2回目の実習内容の違いから、提出レポート等の課題も違ってくるという事態は、結果的に実習生間の公平を欠くこととなったのではないだろうか。学部別の実習実施者数は下記のとおりである。

	人文学部	教育学部	理学部	計
第1回 7.26~7.30	16人	11人	28人	55人
第2回 8.2~8.6	33	10	9	52
計	49	21	37	107

公開講座「日本の思想と美」は、60名の受講者を集め、下記の講師及び講義科目で開講された。

**講師及び講義科目**

回・月日	講義科目	時間	官職氏名
第1回 9月25日	開 講 式		
	天平の思想と美	90分	山形大学教授 仲野 浩
	石の心をよむ	90分	山形大学教授 青木 和子

回・月日	講義科目	時間	官職氏名
第2回 10月2日	考古学から美術史を見る	90分	国立歴史民俗博物館学芸員 佐原 真
	国風文化の形成	90分	学習院大学教授 笹山 晴生
第3回 10月9日	中世仏像の美—その造形表現—	90分	東北芸術工科大学教授 牧野 隆夫
	祖師絵伝と鎌倉新仏教	90分	山形大学助教授 松尾 剛次
第4回 10月16日	日本近代美術・リアリズムの希望—高橋由一から岸田劉生まで—	180分	東北芸術工科大学教授 黒江 光彦
	終 了 式		

今年度で12回目を迎える公開講座だが、今年度は初めての試みとして、学外から4人の講師を招くと共に、「日本の思想と美」の総合テーマに従い、ほぼ時代を追いつながらの講義順で構成してみた。講義の内容が、例年、受講者から希望の多い歴史・美術関係に集中したためか、講義の出席率、関心共非常に高く、好評のうちに終了することができた。

なお、公開講座の延長として10月16日から29日まで、図書館会議室において特別展「日本の思想と美」を開催、500名近い見学者でにぎわった。

**平成4年度見学者総数**

一般成人	個人	610 (人)
	団体	74
大 学 生	個人	287
	団体	145
児童生徒	個人	1
	団体	59
合 計	個人	898
	団体	280
	総数	1,178

山形大学附属博物館 蔵20 1994. 3. 30発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
(〒990) 山形市小白川町一丁目4-12  
☎0236-31-1421 (内) 2921